

安部忠三著

品子とその背景



羽田書

安部 忠 三 著

晶子とその背景

羽 田 書 房

昭和二十二年七月一日 印刷
昭和二十二年七月五日 發

著 者 安 部 忠 三

發行人 羽 田 秀 次
京都市上京區小山東大野町二八

印刷人 大寶印刷株式會社
京都市下京區東九條山王町三八
代表者 石 井 喜 太 郎

發行所 羽 田 書 房
京都市上京區小山東大野町二八

配給元 日本出版配給株式會社
東京市千代田區丸の内二九



會員會社A二〇八〇六八
電話四七七一六七
振替東京一〇二二九九



晶子肖像

大正六年五月二十八日午後八時二十分大阪
驛頭にて新聞社の寫眞班が撮影したもので、原版には
出迎への小林夫人高安やす子氏とともに寫つてゐる。
その處女歌集「みだれ髪」を想はしめるものがある。

京都、小林政治氏秘藏。

晶子とその背景

著者

題名

作樂味臨本
品午製文館蔵本

蔵
出

品子と母の背景

題簽

裝畫

新村 出

品子處女歌集みだ
れ編輯版本による

目次

序に代へて……………五

一、晶子の作品……………九

一、個性解放と浪漫精神……………九

二、情熱の軌跡——秀歌鑑賞——……………三〇

二、晶子の背景……………一〇三

一、「明星」の光芒……………一〇三

二、才華の星座——新詩社の人々——……………一二八

與謝野晶子の生涯……………一六八

與謝野晶子の著作解説……………一六九

序に代へて

中學時代に短歌を作る友人があつて、その感化で兎に角作りはじめた自分であつたが、既に世を擧げてアララギ全盛時代であつたから、とりあへず自分も萬葉集ぶりの大風な寫生歌を作つてゐたわけであつた。併し、時としてさういふ無反省にして怠惰なる自分の作歌精神に疑をもたないわけにゆかなかつたし、その頃からどうかと言ふと、常道の、あたりまへなことを嫌つた自分としては、何かもつと別な方向をもとめる心が常にあつて、御多聞にもれずひそかに啄木の作品などを食ふごとく讀み、さかんにその模倣をやつたものだつたが、新詩社の歌も、さうした自分の、いはばやんちやな心情からでたらめに讀み耽つたのであつた。與謝野晶子ばりの戀歌などを幾つも作つたことを思ひ出すと冷汗ものだ、顧みて、あの習作時代はやはり樂しかつたことは間違ひがない。反省の缺けた、盲目的な模倣の時代ではあつたが、今日から顧みると、少くとも、その後のへんに大人びて、寫生歌のデッサンを勉強した時代よりは、自分も純情であつたことをしみじみ回想せざるを得ない。

後年やうやく歌のわかりかけた頃から、暫く新詩社、浪漫歌風から隔たつてゐたが、縁があ

つて、「晶子論」を書くことになり、友人の、山崎敏夫から改造社本の短歌全集三冊を借出し頭からガリガリ噛むごとく讀んだ。そしてあらためて晶子短歌の、比類を絶した美しさに接したのだつた。惚れつばい自分が、手もなく晶子短歌の絢爛たる浪漫性に兜をぬいだのだと、今度はさう簡単に言へなかつた。實際のところ、後期の作品の平淡調には若干の退屈を禁じ得なかつたが、初期のむせかへるばかり濃厚な浪漫精神には、全く敬服の念を新たにしたのであつた。青春の日の現實短歌に對する自分の叛逆心が、再びよみがへる思ひがあつた。若い日とはちがつた、もう少し切實な思ひでアラギズムに反抗をかんじてゐた當時の自分が、晶子の短歌を綱媒として、はつきりと姿をあらはした感じであつた。自分の作歌のうへに、かうした感じが少しづつ影響をあたへて行つたことは、誰も知らない。

それから戦争が來て、日本のなかの一切が破摧されたかの如くであつた。自分もその破摧の眞つただなかにあつて、生活のうへに言語を絶する嵐が襲ひかかり、短歌に對する自己批判のやうなものは、もとよりすべてこれを抛棄してしまつた。

併しながら戦争は慘澹たる敗戦を結論として終結した。自分も亦、もう一度自分の立場へ歸る日が來た。靜かに自分を取り戻したとき、自分の短歌生活が恰かも出水のひいたあとの清ら

かな泉のやうに、しみじみと再び湧き出ではじめたのであつた。そして、中斷されてゐた自分の浪漫への憧憬が、思ひ出されたやうに、もう一度自分によみがへつて來た。

この國の慘澹たる現實の前に、自分は短歌といふものの運命をしづかに考へざるを得ない。或る人はほとほと精根の盡きた表情をして短歌の滅びの日が來だと言ふ。短歌といふ形式はもとより残るけれども、もはや純粹なる詩としての短歌は姿を消すであらう、と言ふのだ。自分はその人がさういふことを言ふ心持をよく理解するが、結論はちがふ、大いにちがふ。

むしろ、この時にはじめて短歌に浪漫精神が復活する日が來たことを自分は慶びとするものである。久しいあひだ喪はれてゐた歌壇の浪漫精神が、この救ひのない日本の文化のうへに、滋雨のごとくにしみじみと降りそそぐ日が來たことを。

晶子短歌の、あの豐麗な花やかな浪漫性がもう一度あのやうな形式で出現するとほ必ずしも思はないが、少くとも、晶子の時代を回想することは、今日のこのときに極めて意義深きもののあることを疑はない。

このたび畏友小泉三兄の勧めに應じ、閑ならざる勤務の餘暇を割いて書き了へた本書を世におくるのも畢竟、うちまどふ現在の歌壇に若々しい浪漫の清風をおくらうとする自分の念願

からに他ならない。

資料はすべて小泉兄の好意によるもので、その勞作に成る論策の、あるものは未刊のものを
すら惜しみなく提供せられた友情に對して、心から敬意と感謝とをささげる。

昭和二十二年一月

安部 忠三

一、晶子の作品

一、個性解放と浪漫精神

——晶子短歌の特質——

明治の三十年代、それは日清戦争の終つた後、日本の國に確立したところの資本主義による社會機構が著しい成長を遂げたのに伴つて、今まで明確な導精神を持たなかつた文藝の世界に急速な勢ひで浪漫精神が擡頭して來たのであつたが、その文壇の指導者となつたのが實に詩歌であつた。特に新體詩と竝んで勃興した新しい國民詩としての短歌が、この浪漫精神の旗幟をおし立てて、當年の文學愛好者たちが風を望んで寄る激流の、水先案内として立つた事實を現在の、この敗戦後の日本國民として吾らは憧憬に似た感情をもつて回想せざるを得ない。それは小さく言つても日本の短歌を抒情詩としての本質に呼び戻した大きな効果があつたのであるが、大きくながめて、鎖國的に窒息状態にあつた日本の文藝に生き生きとした浪漫精神を吹きこむことによつて、これを復活せしめたといふ偉きな寄與をしたのであつた。

今は短歌の世界に視野を局限して考へてゆくことにする。桂國末流の技術化した膠化した短

歌に生命の息吹を吹きこみ、われらの短歌を再び明るく抒情の廣野に導き出した當年の浪漫運動の創始者は言ふまでもなく新詩社の人々であつた。これを主宰した與謝野寛（鐵幹）の經營者としての功績は姑くおく。作品の面よりする浪漫運動の強い烽火をあげた第一人を與謝野晶子なる女性歌人とすることは、決して私の獨斷的評價ではないであらう。その夫である與謝野寛も亦、すぐれたる歌人であり、晶子もその作品、その文學主張に啓發されたことは勿論であるが、豊かなる詞藻、限りなき熱情と才華、晶子の絢爛たる作品行動が實に新詩社の最も強力なる發動力であつたことも亦否定しがたい事實である。寛の作品を仔細に見れば、彼自身、「明星」創刊以後の作品においては、著しく晶子短歌の驚嘆すべき感染力に壓せられ、抑へられてゐることを見のがすことは出来ないのである。

即ち、われらの近代短歌は實に與謝野晶子によつてその黎明の鐘をうち鳴らされたのである。寧ろあらためて私は晶子短歌を具さにその作品について鑑賞してゆくつもりであるが、ここには、豫めこの近代短歌の母性である晶子短歌の本質を展望しておきたいと思ふ。

晶子短歌の本質がその解放されたる個性讃嘆の精神より華さいた浪漫主義であつたことは言ふまでもない。

北村透谷や島崎藤村等による「文學界」が既に明治二十六年に創刊せられて、いち早く日本の文壇に浪漫主義の機運をもたらしたのであつたが、日清戦争の勝利により、日本資本主義がさかんなる成長期に向つたのに伴うて、この機運は更に高められ、明治三十三年四月新詩社が「明星」を創刊して以來、日本の文藝界は浪漫主義がその主流を占めるに至つたのであつた。いはば時代の早産兒としてその絢爛たる出發にも拘らず文藝界の指導性を把握するに至らずして亡びた「文學界」は、概念的に言つて何か精神的な纖麗さをもつてゐたのに對し、「明星」は時代の支持にもよるが、遙かに肉體的な強靱さをもつて輝かしき繼承者として登場したのであつた。その代表者として我が興謝野晶子がある。「星董調」といふ呼び名が「明星」の浪漫短歌に屢々冠せられるけれども、私観によれば、少くとも晶子短歌の浪漫主義は、その呼び名のやうな嫵々たる哀韻、纖弱なる感傷性は寧ろ甚だ少いのであつて、そこには奔騰する熱情があり、驕慢なる自己讃仰があり、奔放不羈なる青春の歌がある。晶子はその歌論の中で屢々萬葉集の歌を盲拜することを否定してゐるのであつて、その歌の世界はむしろ平安朝短歌によつて開花してゐるといふことに定評がある。参考としてその「詩歌について」といふ晶子の文章をここに引用しておく。

「近頃の歌人が先づ『萬葉集』から國文に指を染められたりするのは或は損な方法ではない

かと考へてゐる。何れかと言へば「萬葉集」は疎枝大葉の文學です。ああいふ容易な文學から入門すると、平安朝の精緻幽婉な感情が面倒になり、どうかすると「源氏」や「榮華」の妙味が解らずに終る事になる。日本の古典文學は決して「萬葉集」に盡きるものでな、平安朝の文藝復興が新しい創造の花實を豊かに示したので後の江戸文學をも發生せしめ、其他の藝術が悉く平安朝に影響されて起つたのである。博く公平に日本文學を味はつて祖先の遺産を繼がうとする人々は平安朝の藝術を開却すべきでないのは云ふ迄もなく……云々。——このやうに晶子は不思議に萬葉集を軽く考へてゐる。ところが興味の深いことは與謝野寛は又、萬葉集を相當に高く評價してゐる事實があり、事實において寛の初期の歌風には多分に萬葉集の影響が認められるといふことで、晶子がその本質において王朝文學の影響を多分に受けてゐることはもとより否定しがたいけれども、その感情的なる作品において、もう少し具體的に言へば戀愛を詠んだ作品にあつては、その高騰する情熱を驅つて萬葉への飛躍を遂げてゐる事實も亦掩ふべくもない。

晶子短歌の世界を私は大きく二つに分けてその一つを感情的なるもの、即ち愛慾の歌の世界とする。

道を言はず後をおもはず名を問はずここに戀

ひ戀ふ君と吾を見る

かざしたる牡丹火となり海燃えぬ思ひみだる

る人の子の夢

なさけの火われと燃えつつ身をまきぬ心はい

づらゆく方しらすも

我がこころ君を戀ふると高ゆくや親も小さく

道も小さし

かかる一群の相聞歌は晶子短歌の最も明白な特質であり、浪漫歌人としての晶子の意義を示すものであるが、その表現の詞句の措置については姑くおくとして、その眞情、その情熱の馳驅するところ、私は萬葉集における女性歌人の相聞の秀歌を想起せざるを得ない。これは主として初期の晶子の戀歌を鑑賞する時に私の感じるところで、洵に皮肉な事實であると思はれる。

個性の解放が新詩社の浪漫精神の根幹であるとする私の觀察よりして、この稀有の才華を抱いた女性歌人が、その絢爛たる詞華を驅使して、飽くことなく戀愛生活の詠歎を歌に託したところ、奔放無礙、淫蕩に墮した作品が又、決して尠しとしない。處女歌集「みだれ髪」は明治三十四年（晶子三十四歳）に刊行せられ、その豊かなる詩才、奔放なる情藻に一世を瞠目せし